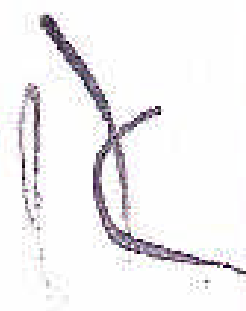


田中藤穂
水瓶座



冬鳥のひそと来てゐてひそと去る

紅梅のことさら濃きを指させり

日々を飢ゑて一途なりしよ敗戦忌

寂寞や唇にふれゆく花吹雪

猫の餌買ふだけのこと鳥曇

朧夜のくる影のみな吾子に見え

濁り川濁りましゆき桜桃忌

遠蛙父の掌うすくなりしかな

月見草誰かが人を呼んでゐる

ボロ市の人分けて買ふ桜草

春の灯やバレーLESSンガラス張り

砥の色の道が―すぢ月見草

青しぐれ男湯を洩る木挽唄

満天の花火へ翔べり天道虫

時雨きて五重塔は重くなる

奉納相撲一行の居る秋の宿

月明の水に棲むもの水揺らす

涛音は空耳露の冬二詩碑

ぼたんゆきときにおろかな母の愛

寒牡丹こころ立てなほして離る

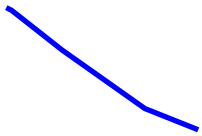
雪原をでるまで一途振り向かず

お隣も孫が来てをりクロツカス

髪上げしーと日は若し黄水仙

酒蔵のをぐらきを出てジギタリス

白南風や海の神官大男



この踏絵踏まざりし人よ百合白し

雲の峰くづれて翳る草千里

菩提樹や戦傷負ひし阿弥陀仏

かげらふや原爆浴びしマリア像

うからみな老いて炎暑の寺に坐す

風通るところが客座キリン草

夕月を見てをり団扇つかひをり

まくはうり明治のはなし面白き

赤とんぼ水車小屋まで祖母呼びに

遠くより一つの視線落葉降る

着ぶくれてホ口ホ口鳥の檻の前

ほろ苦きものはじめや落の臺

土佐水木髪ますくなる子を愛す

羅を着て奔放になりきれず

〇脚を父より継げり遠蛙

海底に蛸壺島に月明り

夏蝶に生まれてすぐに海が見ゆ

紬脱ぐ音のつめたき夜の畳

掌から掌へ賜はりしもの零余子の実

牛小屋を牛が抜け出しつくしんぼ

メタセコイヤ芽吹けり沼は星沈め

人偲ぶために牡丹と籠り居る

夜祭のわが門前の草魚売

枝垂梅枝を荒しと思ひけり

原風景ふらここのある砂山

花衣脱げばたちまち髪白く

農夫の手筈がばと裸にす

パンを売る店明るくてマスクとる

花屑のやうに片寄り流し雛

春埃はらへばギター鳴りいづる

その中の一人は無口秋遍路

顔が出て何か見てをり蔦の窓

手鏡の裏側暗き晩夏かな

病む師なほ心の支へ秋の蝶

それぞれに家あり桜見て別る

熱帯魚のやうな少女ら緑蔭に

肉食べて五臓さびしき盆の宵

枯れを来て珈琲店の大鏡

菜を茹でし湯気美しや二月盡

大西日矢のごとく鳥流れけり

日を呑みし谷川連峰草の露

旅先のほどよき欲や栗拾ふ

もの言ひて淋しさ増やす雑煮膳

橋渡り生家朧へ戻しける

冬瓜を食べ前生を思ひ出す

町ぢゆうに名水の湧き鳥渡る

児は眠り天牛鳴くよ籠の中

懷手解けば高言吐きさうで

冬の木を見てゐる腕組をしてゐる

歩きつつ草餅食べて岩船寺

水引草くづし字書けず年取りぬ

枯菊と枯蔦燃ゆる音ちがふ

萩刈るを一日伸ばし何惜しむ

火祭の火の座の跡や山しぐれ

節分の病人食の鯛かな

酒蔵はワイン横たへ鳥雲に

蕎麦刈つて紅き山畑雲流る

富士消えて甲斐駒峨峨と十三夜

黙といふ意思表示あり百匆柿

生返事して木枯を聴いてゐし

ひよんの笛吹き梟を揺り醒す

戦火の日よりの交り菊脛

コスモスや円空仏の顔黒し

古土塀春光をもてあましをり

花会式施粥の湯気の堂に満つ

六月の夜更けは水中のやうに

流燈を水へ置きたる手の残る

夕立の雫したたるポストかな

アルバムやカンカン帽の父に抱かれ

渦潮へ投げて届かぬ草矢かな

九月来ぬまづ踵より身を洗ふ

涼しさや地球の自転寝ておもふ

真つ白な朝の芙蓉と茹玉子

六行の遺書を諳んじ鰯雲

白萩やゆめのつづきはまたの世で

著者略歴

田中 藤穂（本名・俊子）

昭和2年2月10日 東京生

昭和22年 秋結婚、生家荒川区日暮里から北区田端へ移る。（旧姓・藤波）

昭和55年 暖流入会。瀧春一先生・鈴木石夫先生・高島茂氏のご指導をいただく。



句集
みづがめざ
水瓶座

発行日 二〇〇〇年二月十日

著者・田中 藤穂

発行者・佐藤 喜孝

発行所／印刷・HIRO制作室

〒164-0011

東京都中野区中央2-50-3
電話03-3371-4623

カット・赤座吉保

製本 (株)花岡製本所